



1・章

あれれ？　なんで俺、スカートを着ているの？　なんとなく視線が自らの足元に漂って行って、俺はぎょっとした。

ひらひらっとしたミニスカート、ほっそりした脚、華奢なヒールのサンダル。これが俺の下半身か？　なんでなんで？　なんでなんだよっ、と叫びたくなったのをこらえて、連れであるらしき、近くにいる人間の顔を見た。

ここはライブハウスでもあるのだろうか。俺たちのずーっと前のステージではガールズバンドが演奏している。下手くそな女たちの演奏を耳に留めてはいたものの、たいして意識もせずに、俺は隣に立って身体を揺らしている女を見た。

「おまえ、誰？」

「うるさいね。黙って聞きなさいよ」

「こんな下手な演奏、どうだっていいじゃんよ。おまえは誰だ。俺は誰だ」

「晶、変だね。なに言ってんの？　記憶喪失？」

「俺はアキラなんだよな」

「そうだよ。ユキはユキちゃん。晶は水晶の「晶」。ユキはカタカナのユキ」

面倒くさそうにユキが教えてくれ、俺は首をひねり続けていた。

ユキもひらひらのミニドレスを着ていて、ネットみたいなストッキングにブーツを履いている。服装は俺と変わらないし、俺が俺であるのならば、年齢も同じくらいだろうか。高校生であろう。

しかし、俺が男なのだったら服装倒錯しているのではないだろうか。俺には女装趣味があったか？　ないないない、そんなものはないっ!!　だったらどうして女の子の服を着ているのだ。頭がおかしくなってきたようで、俺はいやがるユキを引っ張って店の外に出た。

「ユキ、俺って男だろ」

「なーに言ってんのよ。あんたのその服といい、その声といい、顔は自分では見えないにしたりして、女の子でしょ。晶、どうしちゃったの？」

「えとえとえと、あのバンドの演奏がひどすぎたから、頭がちょっと……ちょっと待ってね」

じろじろと俺を見ているユキをごまかしておいて、俺は悩んでいた。

さっきから喋っている俺の声は、記憶の中の声よりも細い気がする。高校生のわりには俺はかなり高くて女の子に近い声をしてはいたはずだが、女の子の声ではなく少年声だった。年齢からしても少年なのだから、不思議でもないだろう。

その声が女声になっている。なによりもこの服だ。俺はユキから離れて、ライブハウスのガラス戸に姿を映した。近寄ってまじまじ見つめるに、女だ。俺は女だった。

「.....わかった」

突っ立っているユキのそばに戻ると、俺はとりあえずそう言った。

「女装趣味よりはいいってか.....なんだかよくわからないけど、あのひどい演奏のせいだよな。ユキ、帰ろうか」

「帰るなんてやだ。ユキはもっと演奏が聴きたいの」

「あんなの聴いてるとますます頭が変になるよ。耳も変になるから帰ろうって」

「晶が誘ったくせに」

「俺がまちがってた。帰ろう」

やだやだとユキは言い、帰ろう帰ろうと俺は言い、ライブハウスの前でもめていると、ユキの顔が急に、うへっとなった。

「お兄ちゃん.....やばっ」

「兄ちゃん？」

背の高い男が近づいてくる。ユキの兄貴にしてはずいぶんと大人だが、兄ちゃんと呼んだのだから兄貴なのだろう。

「ユキ、酒を飲んでるな。ライブハウスには未成年立ち入り禁止でもないんだろうけど、酒は禁止だろ。そっちのきみも、ユキの友達だね」

「んんと.....」

「晶は下手な演奏のせいで頭が変なんだって」

うまい具合に、俺の記憶にはない部分もユキが話してくれた。

「晶は同じ高校の一年先輩なんだ。入学式のとくに二年生たちが歌を歌ってくれたって話したでしょ？ 晶はバックでギターを弾いてたの。そのあとで校庭で会って、ユキが話しかけて仲良くなったの。晶はロック好きだって言うから、ライブハウスに連れてきてもらったのよ。将一兄ちゃんにだって言ったじゃん。行ってもいいって言ったじゃないのよ」

「ライブハウスはいいけど、酒は許してない。俺が許したとしても、法律が許さないだろ。高一と高二の女の子が酒なんか飲んで、補導要員にでも見つかったら大変だぞ。晶もユキも悪い子だ。連れて帰ってお仕置きをしないとイケないな」

えらく顔立ちがいい男なので、怖い顔をするといっそう怖い。反抗できなくなって口をとがらせていると、ユキの兄は言った。

「俺はユキの上の兄の将一だよ。三十五歳。作曲家」

「作曲家なの？」

「そうだよ。きみの家は？ 送っていこうか」

自分の記憶とは決定的にちがう、俺は女の子だ、というのがあった。俺の兄たちの話をしてもいいのだろうか、とためらっていると、ユキが言った。

「兄ちゃんに見つけられちゃったんだから、晶、帰ろう。晶だって兄ちゃんたちにお酒を飲んだって知られたら叱られるでしょ」

「だろうね。晶ちゃんにも兄さんがいるのか」

三人で連れ立って歩き出しながら、ユキが話した。

「晶には社会人になった丈人お兄ちゃまと、大学生の真次郎お兄ちゃまがいるんだよね。ユキと

お兄ちゃんたちほどじゃないけど、けっこう年は離れてて、丈人さんが六つ上、真次郎さんは四つ上。晶は高校生になった年に、東京に来てお兄ちゃまたちと同居してるの」

「ユキ、おまえ、晶ちゃんは年上なんだろう。先輩を呼び捨てにするのか」

「いいのいいの。年上たって友達なんだもん。それでね……」

お喋りユキの話の内容で、俺の記憶はおおむねは正しいと知った。が、俺が女になっているのは歴然とした事実だ。ユキという名の女友達がいるなんて覚えもない。なにがどうしてこうなって、俺はこうなっているのだろうか。

「あのさ、俺さ……」

言いかけたら、将一さんがちょっと驚いた顔になった。

「晶ちゃんは俺って自称するのか」

「そうなの。晶ってどっか男の子みたいなんだよね」

知っていたからこそ、ユキは俺がこうやって喋ってもびっくりしなかったのか。将一さんも苦笑はしているものの、咎める気はないようだったので、それだけは安心した。

「晶には言ったけど、忘れてる？ ユキには二十歳年上の将一兄ちゃんと、十八歳年上の隆也兄ちゃんがいるんだよ。ユキの両親はユキが小学一年生の年に死んでしまったから、それからはお兄ちゃんたちに育ててもらったの。ちっちゃいころには聞き分けがないって叱られて、お仕置きだってされたけど、もう高校生だもん。将一兄ちゃん、お仕置きなんかしないよね」

「二度と酒は飲まないな」

「はい」

「晶、きみは？」

「あんたに呼び捨てにされるいわれも、命令されるいわれもないんだよ」

兄たちには反抗している癖が出て、ユキの兄にもさからうと、ユキが言った。

「だったら、丈人さんや真次郎さんに言いつけちゃおっと。晶はお兄ちゃまたちに叩かれたりはしないの？」

弟だったら頭を殴られたりはしたが、妹にもするのだろうか。しないとは言い切れないので、俺はうつむいてもごもご言った。

「晶にも保護者がいるんだから、兄さんたちにまかせようか。晶を送って行って、おまえの説教は帰ってからだ」

「将一お兄ちゃまあ、ごめんなさい、ごろごろ」

猫真似をしているユキの頭を撫でて、将一さんは豪快に笑った。

車に乗ってからも、俺はくよくよと考えていた。俺は誰？ 晶？ 章？ 丈人と真次郎の弟？ 妹なの？

記憶の中には、俺は丈人と真次郎の弟、章だ。というのしかない。ユキが将一さんに言ったことは、大部分が俺の記憶と一致しているのだが、ユキなんて奴と友達になった覚えもなければ、俺が女の子だという覚えもないのだ。

友達はどうでもいいにしても、あまりにも大きな違いだろう。弟と妹では。

うちの兄ちゃんたちの記憶の中では、俺は妹なのか、弟なのか、それを考えるとわめきそうに

なるのだが、ひとまずはうちに帰るしかない。将一さんが運転する車のバックシートにすわり、将一さんとユキの兄妹の会話を聞きながらも、俺は頭を悩ませていた。

「晶はロック好きだから、お兄ちゃんが作曲家だって知って憧れちゃったんだよ。将一兄ちゃん、晶に恋をされたらどうする？」

「おまえたちから見たら俺はおじさんだろ」

「お兄ちゃんはおじさんじゃないもん。カッコいい大人だもーん」

「そうやって説教から逃げようとしてるだろ。その手は食わないよ」

「ああん、食って食って、食べて食べて。お兄ちゃま、ネクタイが曲がってるわ」

「その態度はバーのホステスみたいだな」

「お兄ちゃまったら、バーなんて行くの？ そしたら女のひとをさわったりするの？ やーねやーね、いやらしいんだから」

「こら、おまえがさわるな」

「きゃあん、お兄ちゃまが怒るう」

妹ってのは兄にはこんな態度なのか。兄は妹にはこんなふうなのか。俺には新鮮に映る。

将一さんが作曲家であると知って憧れたのは事実で、どんな曲を書くのか尋ねてみたい。けれど、今の俺はそれどころではない。うちにつくのが恐ろしかった。

俺にはユキと友達になった記憶も、ユキを誘ってライブハウスに行った記憶もない。では、俺の記憶では、あそこでふっと自分の下半身を見てぎょっとする前には、なにをしていたのだろうか。頭の中を探ろうとすると頭痛がしてきた。

もしも兄たちが俺を妹として、なんの疑いも見せずに受け入れたとしたら、ユキをごまかした通りに、下手くそなバンドの演奏のせいで頭が変になって、俺は本当は男なんだ、と思い込んだと？ それでいいのだろうか。

ただひたすらに悩んでいるうちに、車が兄たちと暮らすマンションの前に到着してしまった。将一さんはブレーキをかけ、言った。

「俺も挨拶に行こうか」

「いえ。いいです。ひとりで帰ります。今夜はどうもでした」

おまえは誰だ、と兄たちに言われるのと、晶、お帰り、と言われる可能性は五分五分ではないだろうか。晶なんて女の子は知らないと言われたら、俺はどうすればいい？ そう考えると足が竦む。車から降りるのをためらっていたら、将一さんが先に降りて行ってドアを開けてくれた。

「ユキの友達の兄さんたちなんだから、俺も挨拶するよ。ユキも降りなさい。晶も降りておいで」

そのほうがいいのかもかもしれない。兄貴たちが俺を知らないと言ったら、将一さんが救ってくれるだろう。

部屋を見上げると灯りがついている。丈人か真次郎のどちらか、もしくは両方、うちにいる。俺はどっきんどっきんしながら、先頭に立ってふたりを俺の家に連れていった。ここは俺の家。ふたりの兄と弟の章の家。そうではなくて妹の晶の家？

鍵は持っているのでドアを開けた。鍵が合ったのでほっとして、俺は中に呼びかけた。ただいまー、とかけた声は震え気味だったのだが、おう、アキラか、と真次郎の声がして、どすどす

どかどかと足音も聞こえた。

アキラってどっち？ 晶？ 章？ 音は同じなのに、俺の耳には別の名前に聞こえる。アキラってどっちだよ？

「ん？ 誰かと一緒か」

玄関にあらわれた真次郎は、俺の記憶通りの姿をしていた。

「晶、どこに行ってたんだ？ いや、それはいいけど、どなたでしょうか」

真次郎が問いかけると、将一さんが応じた。

「晶ちゃんからお聞き及びではありませんか。晶ちゃんは私の妹のユキとライブハウスに行っていたんです。迎えにいつて送り届けてきました」

「ああ、そうだったんですか。それはどうもありがとうございます」

この反応は、俺をごく普通に妹として認めたものだろう。真次郎に弟の章がいるとしたら、女の子の服装の俺を見て、こんなふうには反応しない。まさか弟と妹の両方がいたりして？ そこまで考えるとなおさら気が変になりそうなので、考えないことにした。

将一さんと真次郎は初対面の挨拶をかわしている。ユキも可愛いふりをして真次郎に挨拶している。そんな三人を見ていると、安心したのとわけがわからないのがごた混ぜになって、膝が崩れてしまいそうだった。

「もうひとり兄がいるんですけど、今夜は残業だそうでまだ帰っていないんですよ。お上がりになりませんか」

この荒っぽい兄貴も、まともな口がきけるんだな。真次郎を見てそう思えるようになったのは、とにもかくにも安心はしたからだろう。将一さんは礼儀正しく真次郎に断りを言って、ユキとともに帰っていった。

「兄ちゃん……俺さ……」

「ユキちゃんってのはおまえの友達なんだったら、おまえのその口のききようも知ってるだろうけど、将一さんは驚いてたんじゃないのか」

「俺って言うから？ だってさ……」

「高校生にもなったんだから、もうちょっとこう女らしく喋れよ。って言ってもな、兄貴も俺も口が荒いし、おまえが似るのもしようがないっちゃしょうがないんだな。けど、ユキちゃんだって兄さんがふたりなんだろ。あの子は女の子らしいじゃないか」

「そうみたいだね」

「ま、いいさ。晶、ぼ一と立ってないで入れよ」

俺の背中を押そうとした真次郎は、鼻をひくひくさせた。

「おまえ、酒を飲んでるだろ」

「……わかる？」

「飲んだものはしょうがないけど、高校生に酒を飲ませるとは、店も犯罪だよな」

ぼかっとやられるのかと身構えたのだが、真次郎は手を上げようとはしなかった。弟だったら殴られているに決まっているのだから、妹のほうがいいのかも。俺はちらっとそう思い、よくなかないのか、いいのか、そんなことすらわからないままに部屋に入っていった。

やがて帰ってきた丈人も、ごくごく自然にふるまっていた。つまり、兄たちの記憶の中でも俺は晶で、彼らの妹なのだろう。

ぐったり疲れた気分で自分の部屋に入り、部屋の中をあちこち確認した。章の部屋のようにも、他人の部屋のようにもある。風呂場を見た自分の姿を思い出すと眩暈がしそうだったので、考えないようにしてベッドに入った。

「これってなんなんだろ……だけどさ、俺はアキラじゃん。名前も同じようなもんだし、俺って言っても友達や先生は驚いたりはしないんだろ。学校には制服もないから、パンツルックだっていいんだよな。男と女ってそんなにちがうか？ ちがわない。こうなったんだから俺も受け入れよう。どうにもならないものはどうにもならないんだからさ。でも……」

起きたら男の章に戻っていないかと期待して、俺は眠った。

この寒いのになんだってこんな山の中に来て、なんだって林の中をランニングなんかしているのか、俺は知らない。兄貴たちが走ると言い出したのでついてきただけだ。

この林から少々距離のある場所に、貸し別荘が並んでいる地域がある。俺も学校が冬休みになったので、兄貴たちが別荘を借りて連れてきてくれたのだが、ただの遊びなんかではないはずだ。遊びに来るにはなんにもなさすぎる場所なのだから。

もしかしたらここには地球防衛軍の基地でもあるのか。宇宙からの侵略者のアジトでもあるのか。兄貴たちがなにかを言うと言い出すと、俺の発想はそっちへ向いてしまう。俺は今年の夏休みにはあんな変な経験をしたのだから、当たり前だ。

「兄ちゃんたち、ここにはなにかあるんだろ。そんなに早く走らないで、ゆっくり走って教えてよ」

どこかの別荘であるらしき家の前でふたりともに立ち止まり、俺も立ち止まった。

「うん、まあ、怪しいかなって感じる奴はいるんだよ」

スタミナも人間離れしている丈人が言い、同じく超人的体力を持つ真次郎も言った。

「そいつの山荘がここにあって、ちょっと偵察してきたかったのがあるんだ。ほら、あれだよ」

三兄弟の中ではたったひとり、すべてが普通の人間である俺は、早くもばてかけていたのだが、真次郎が指差す山荘のテラスを見た。

テラスに女がいる。銀色の髪の毛をしているのでおばあさんかと思ったのだが、よく見ると若い女の子だった。女の子はテラスの床でなにやらしている。腹ばいになってなにかをいじくっているようなのだが、それがなんなのかは俺には見えなかった。

「ネズミだな」

視力も人間離れした丈人が言い、真次郎もうなずいている。女の子がネズミで遊んでるのか？

おもちゃのか？ と疑問に感じて質問すると、真次郎は言った。

「生きてるネズミだよ」

「女ってネズミは大嫌いなんじゃないの？」

「そうでもない女もいるだろうけど、変わった女だな。えらく可愛い顔をしてるのに……」

小声で真次郎と話していると、テラスに男が出てきた。男の声は俺の耳にも聞こえた。

「みゅう、こんなところにいたら寒いだろ。中に入れよ」

言いながら、男が女の子の手元を見た。男の表情までは見えなかったのだが、呆れたような声で彼は言った。

「おまえはネズミを食うんだっか？」

「食べないけど、面白いよ。ほら……」

「やめろよ。俺は首をもがれたネズミも、ネズミの首も見たくないよ」

「隆也兄ちゃんったら、こんなの怖いの？」

「怖くはないけど、血まみれじゃないか。そんなもので遊ぶのはやめて、中に入って熱いココアでも飲もう」

「もうちょっとしたらね」

女は腹ばいの姿勢でごそごそしている。男はテラスの椅子にすわって女を見ている。あの女は

生きたネズミをおもちゃにして、首をもいで遊んでいるのか。血まみれスプラッタ？ うげげえ  
と言いそうになっていると、丈人が言った。

「男よりも女が怪しいみたいだな」

「うーん。単に変な趣味ってだけかもしれないけど……」

俺は兄貴たちに問いかけた。

「あの男が怪しい奴なの？ あいつ、誰？」

「おまえも名前は知ってるんじゃないのか」

丈人が教えてくれた名前は、作詞家の一条隆也。俺の好きなロックバンドのCDで見た覚えのある名前だった。知ってるよ、と俺が言うと、丈人が話してくれた。

「あいつが兄貴と弟と三人で暮らしてる家ってのは、俺たちの担当エリアにあるんだよ。マンションじゃなくて大きな住宅だ。一条隆也には兄と弟がいる。三兄弟ってところは俺たちと同じなんだけど、年齢の差は大きい。兄の将一が三十四歳。隆也は三十二歳。弟の幸生は十四歳の中学生だ」

「それって別に怪しくないじゃん？」

「年齢差のありすぎる兄弟だから怪しいってんじゃないんだ。彼らは両親を早くに亡くして、そのころは小学生だった弟を兄たちがふたりして育てた。亡くなった両親も音楽家だったらしい」

「それも怪しくないじゃん」

「黙って聞けよ、章。そこんところは別に怪しくはないんだけど、どこかがどうも怪しいんだよ。俺の勘に障ったとでもいうのか、けぶりが怪しい気がしてそれとなく探してみたら、本当に怪しかったんだ」

「だから、どこが？」

「こそこそとなにかやってるんだ。さっき、あの女は隆也を兄ちゃんと呼んだだろ。隆也には弟はいても妹はいない」

「いとことか？ 近所の子とか？ そういう子が年上の男を兄ちゃんって呼んでもおかしくないじゃん」

「そうなんだけど、とにかくだ」

あいつはどうも怪しいんだよ、と丈人と真次郎は口をそろえて言い、兄ちゃんたちがそう言うんだったらそうなのだろう、と俺もうなずいた。

「兄貴……章、ほんとに変だぞ」

怪しい男に聞かれてはいけないので、むこうからは見えない場所に陣取って小声で話していたのだが、真次郎が大きめの声で言って、指でテラスを示した。丈人とふたりして見上げた俺は、首をかしげた。

「猫がいる。あの女はどこに消えたの？ 俺はよそ見してたから見てなかったけど、女は部屋に入ったの？」

「あの猫があの女なんだよ」

「シン兄ちゃん、ますます頭が変になった？」

「俺は頭は変じゃねえよ。身体は変ったら変なんだけど、兄貴みたいな変態でもないし……」

「真次郎、肝腎のことを言え」

「そうだったな。だからさ、あの女が猫に変身したんだよ」

馬鹿じゃねえの、と俺は思ったのだが、丈人は真面目にうなずいた。

「章がメイドルックで潜入した屋敷の主は、狼男に変身したんだよな。こっちは猫女なんだ。章、おまえだって狼男を見ただろ。狼男がいるんだったら、猫女だっているんだよ」

「ああ、そうか」

妙に説得力があるというか、俺だってこの人間離れ兄貴たちと九ヶ月も同居していて、普通の生活だったらあり得ないことをいくつもいくつも経験した。

その上に、俺自身が女装させられてスパイとして入り込んでいた屋敷で、丈人が言った通りのものを見た。兄貴たちが宇宙人に改造人間にされ、地球防衛軍の一員として働いているなんて、できるものなら信じたくはないのだが、すっかり信じてしまっている。

夏休みの経験でおしまいだろう、なんて考えていたのは甘かったらしい。こんな兄貴たちの弟なのだから、これからも人間離れ経験をいくつもしなくてはいけないのか。

だけど、今回は女装はナシだよな？ メイドルックをもう一度着たい気もしなくもなく……いや、したくないっ!! したくないしたくないしたくないっ!! 心の中で何度も、したくないっ!!

と叫んでいる俺をほったらかして、兄貴たちは相談している。

兄貴たちの相談は聞いても意味不明なので、俺はテラスを見上げた。女はいないが男はいる。猫もいる。男は猫を抱き上げ、言っていた。

「おまえはネズミは食わないんだろ。そこまでやったらもういいじゃないか。中に入ろう。ねんねの時間だよ、みゅう」

みゅう……さきほども隆也は女をみゅうと呼んだのではなかったか？ 丈人と俺は見えていなかったのだが、真次郎は女が猫に変身するところを見ていたらしい。今回も信じるしかなさそうだ。丈人と真次郎はびっくりもしていないようだが、俺だってもはやびっくりなんかしない。

隆也が猫を抱いて山荘の中に入っていってしまうと、俺は相談を続けている兄貴たちから離れて、林の中を歩いてみた。

冬なので寒い。兄貴たちは立ち話をしているけども寒くもないのだろうけど、俺は人間なのだから寒いのだ。走るの嫌いだけど、貸し別荘でひとりぼっちにされるよりはましな気がしてついてきてみたら、早速これだ。

寒いのも嫌いなので、小走りになって、ランニングの真似事をしてしていると、車の音が聞こえてきた。兄貴たちにも当然聞こえているだろうから、報告もせずに車が見える場所まで行ってみると、外車がやってきて止まった。

外車であろうとはわかるが、車種までは知らない。カッコいいダークブルーの車から降りてきたのは、背の高い大人の男と少年だった。

「みゅう!!」

甲高い声で叫んだ少年が、先に立って駆け出していく。大人は少年のうしろから、荷物を持って歩いていく。山荘からは隆也が猫を抱いて出てきた。

「みゅう、今日は猫なんだね」

「幸生、このあたりにだって人間が他にまったくいないわけじゃないんだから、大きな声で言

うな。隆也、お疲れ。みゅうはいい子にしてたか」

「してたよな、みゅう？ 将一兄さんこそ、長時間ドライブ、お疲れさまでした」

大人が長兄の将一、子供は弟の幸生か。幸生は隆也の腕から猫を抱き取り、キスしようとして顔を両手で押しのけられている。俺はむこうから見られないように用心しつつ、聞き耳を立てていた。

みゅう、今日は猫なんだね、と言った幸生の台詞からしても、そのあとの将一の台詞からしても、うちの兄貴の真次郎の頭が変になって、女が猫に変身したと見えたのではないだろう。真次郎が見たものは本当にあったことなのだろう。

疑っていたわけでもないが、将一と幸生の台詞で確信となった。

それにしても、隆也って奴は兄さんに敬語を使うのか。見た目もうちの兄貴たちよりも優雅というのか優しげというのか、言葉遣いも大違いだ。うちの兄貴たちにしても、こっちの兄貴たちにしても背が高く、そのわりには弟は小さい。幸生は俺よりもひとつ年下のはずだが、中学生にしても小さい。

あいつも兄ちゃんたちにガキ扱いされてるんだらうな。そうに決まってるけど、兄ちゃんたちは普通の人間だろ？ でも、その分、猫が普通じゃないのか。おまえも苦労してるのか？

俺はそんなことなど考えながら、山荘に入っていく三兄弟のうしろ姿を目で追っていた。

そして俺は、はっと思い出したのだ。あの夢……やけにリアリティがあって、目覚めたときには自らの身体に触れ、俺は男だ、男の章だっ、と確認して泣きそうになったあの夢。あの夢に出てきたのは、ユキという名の女の子と、その兄の将一だった。

あれは予知夢？ そんなはずがないじゃないか。幸生は男だし、俺も男だ。あの夢ではたしか……ユキが高校一年、アキラは高校二年だったが、来年には幸生も章も女に変身するなんて、絶対にない。あるわけがない。

メイドルックって癖になりそう、などと考えていたせいで変な夢を見たのだと、俺は目覚めてから自分を納得させた。あれから俺はメイドルックを着たいとは考えていない。いや、ちょっとは考えなくもないけど……ないないなーいっ!!

なのだから、あれはただの変な夢だ。夢ではなく現実の変な猫を考えないといけない。しかし、俺にはなんにもできないのだから、兄貴たちにまかせよう。そうと決めたら元気が出てきて、俺はまだ相談している兄貴たちのいるところに、駆け足で戻っていった。

庭に捨て猫が迷い込んできたのは、僕が中学三年生になったばかりのころだった。あれから約八ヶ月。みゅうは大人に近い若い猫になっていてもいいはずなのだが、猫の姿をしていても、人間の姿をしていても、少女のまんまだ。

「おまえだって知ってるだろ。猫ってのは成長が早いんだから、生後一年もたたないうちに成熟して発情期を迎えるんだ。みゅうがそうなったとしたら俺たちは困るんだから、成長が遅いのは幸いなんだよ」

将一兄が言いたかった意味は、僕にもわかっていた。

発情期なんてものを迎えたみゅうが、恋をする相手は猫か、人間か？ みゅうが妊娠して産む子供はどっちだ？ 猫は五匹も六匹も子供を産む場合があるそうだから、その子猫がみんな変身猫だったとしたら？

「メスは避妊手術したほうがいいんだよ」

友達はそう言っていたけれど、変身猫を獣医に連れていくとどうなる？ みゅうの身体の内部はどうなっている？ 恐ろしくて獣医にかからせるのは避けているので、ワクチン接種もしていない。幸いにもみゅうは病気ひとつしないのだが、成長しないのも幸いなのか。

むろん僕は友達には、みゅうが変身猫だなんて話していない。みゅうが人間の女の子に変身すると知っているのは、将一、隆也、幸生の三兄弟だけだ。

兄たちはみゅうについてのさまざまなことを考えたり、悩んだりしているようだが、僕には言う。幸生はそこまでは考えなくていいんだよ、おまえはみゅうと会う機会も少なくなったんだから、会ったら可愛がってやればいいんだよ、と。

来春には高校受験なのだから、受験勉強もしなくてはならないのだが、冬休みになって将一兄が、僕を山荘に連れてきてくれた。

「今日のみゅうは猫なんだね。猫のみゅうは可愛いよ。かーわいいよ。食べちゃいたい。みゅう、キスしようよお」

抱っこしてキスしようとしていやがられて、つれなくされている僕を見て、隆也兄は言った。「俺はみゅうは猫でいてくれるほうがいいんだけど、将一兄さんだって同感でしょ？ 幸生もだよな。猫のみゅうがいいよな」

「隆也、みゅうには困らされてるのか」

「だいぶ慣れましたけどね」

「僕もみゅうは猫のほうがいいな。だけど、このごろはみゅうは人間に変身したときには、素直に服を着るんでしょ？」

「それだけはしっかり躡けたよ」

変身猫になってからのみゅうとは、僕はめったに会えない。兄たちが交代で山荘に来てみゅうの世話をし、僕はどちらかの兄と自宅で暮らしていて、長めの休みでないと会えないのだ。前にみゅうに会ったのは夏休みだから、ずいぶん日がたっている。

その間にも写真を見せてもらったり、兄たちから話を聞いたりしていたから、みゅうが少女の

まんまなのは知っていた。猫になって眠っているみゆうは、たしかにまだまだ小さくて子供だ。猫のほうがいいとは言ったものの、人間の少女のみゆうにも会いたいと思ってしまう。

猫のみゆうには両方の兄はべた甘だけど、人間になるとちょっとばかり態度が異なる。将一兄は時にはきびしくみゆうを叱りつけ、いい加減にしないとこれだぞ、と手を上げて脅して泣かせたりもする。

隆也兄は穏やかに辛抱強く、みゆうに言い聞かせる。小さいころの僕にも兄たちはこんなふうだったから、性格の差なのだろうか。

小さいころの僕は、たまには兄ちゃんたちに軽く叩かれたりもしたが、みゆうは実際には叩かれてはいないはず。それでもきびしい将一兄ちゃんは怖いのか、将一兄ちゃんの言いつけのほうをよく聞くのであるらしい。

きびしく優しくあたたかく躡けられているのも、小さいころの僕と同じだ。みゆうにとっても僕の兄ちゃんたちは兄のような存在なのだから、頼りにして甘えて、安心してともに暮らしている。では、僕は？僕はみゆうにとってはどんな存在なのだろう。

尋ねてみたいけど、僕が抱っこして山荘の部屋へ運んできたみゆうは、猫の姿で寝子になっている。猫の語源は寝る子だと教えてくれたのも、将一兄ちゃんだった。

「幸生も腹が減っただろ。今夜はおまえの大好きな、ハンバーグを作ってやるよ。おまえは疲れただろうから、休んでいいよ。将一兄さんも……」

隆也兄が言い、将一兄も言った。

「俺は運転なんかで疲れないよ。みゆうに玉ねぎ抜ききのハンバーグを作ってやろう」

「玉ねぎは抜くといいですよ。俺はハンバーグってのは好きでもないけど、みゆうは食いたがるんですよ。そうだ、その手があったんだ」

ふたりは台所に入っていき、僕は眠っているみゆうに話しかけた。

「みゆう、隆也兄ちゃんを困らせなかった？隆也兄ちゃんのほうが優しいからって、おまえ、なめてるだろ。隆也兄ちゃんにだってびしーっと叱られると怖いんだぞ。ったってね、隆也兄ちゃんは女の子には優しいんだよな。この間、麻実ちゃんををうちに招待したんだよ」

彼女というほどではないけれど、僕には女の子の友達だったらしい。クラスメイトの麻実ちゃんを招いて、一緒に勉強をしたときには、隆也兄ちゃんがいた。

勉強の話をしていたはずなのに、途中から口喧嘩になって、麻美ちゃんは帰ると言い出した。僕も腹が立ったので、帰ったらいいだろ、二度と来るな、と言い返して、隆也兄ちゃんに部屋から連れ出された。

「女の子に対してなんだ、その態度は。そんなだともてないぞ」

「僕はもてるもん」

「もてるからって女の子を粗略に扱ってると、もてなくなるんだよ。麻美ちゃんが本当に二度と遊びにきてくれなくなってもいいのか」

「……いやかな」

「だろ。あやまってこい」

「はーい」

部屋に帰ってあやまったのに、麻美ちゃんはずねていて、隆也兄ちゃんが上手になだめてく

れた。隆也兄ちゃんの口がよく回って、口下手の反対なのは知っていたけれど、女の子には特になんだな、と感心して、僕は横で聞いていた。

どうしてこれで、隆也兄ちゃんは女のひとにもてないんだろう？ほんとに彼女はいないのか？麻美ちゃんはあとから、幸生くんのお兄ちゃんって素敵だね、と言っていたのだが、大人の隆也兄ちゃんが中学生にもてても意味はないのだろうか。

そんな話をみゆうにしてみても、猫だったら通じてもないのかもしれない。それでも僕はその日の話をみゆうにして、会えなかった間の空白を埋めようとしていた。

「幸生の女の子の話なんか聞きたくないよ」

話をしているうちに居眠りしたようで、人間の女の子の声で目が覚めた。

「みゆう？人間に変身したんだね。服を着ろよ。着ないと……」

「幸生にだったら叱られても怖くないよーだ」

「僕の言うことを聞かないだったら、ぶってやろうか」

「やだっ!! 将一兄ちゃん、隆也兄ちゃん、幸生がみゆうを苛めるーっ!!」

みゆうは裸でとことこと走っていき、長袖のワンピースを着てから叫んだ。

「みゆうはなんにもしてないのに、幸生がぶったよお!!」

「ぶってないよっ」

「ぶったもん」

台所から出てきた将一兄が、僕を睨んだ。

「おまえは人間になったみゆうとはほとんど対等の立場なんだから、みゆうと喧嘩なんかするんじゃないぞ」

「対等の立場なの？」

「おまえはまだ躰を受けてるほうだろ」

「僕は子供じゃないのに」

「そうやって口をとがらせてると子供だよ」

怖い顔をしていた将一兄の表情が、ふっとゆるんだ。

「みゆうも嘘をつくんじゃない。幸生はおまえをぶったりはしないよ。してないんだろ？」

「……うん」

だから僕は、兄ちゃんたちが大好きさ。みゆうが嘘をついてるとわかってくれた。みゆうのほうこそしょぼんとなってしまったので、僕はみゆうに言った。

「みゆう、今夜はハンバーグだって。みゆうの分もあるんだよ」

「うん。将一兄ちゃんは、みゆうもこれだったら食べていいよ、って、みゆうのための特製ハンバーグを作ってくれるの」

やっぱりみゆうって、色気より食い気ってやつ？早く食べたーい、なんて言っているみゆうを見て、僕は妙に安心していた。

「みゆう、幸生、できたぞ」

しばらくして隆也兄が呼んでくれて、ダイニングルームに行った。

三人と一匹ではなく、四人で食卓を囲む。みゆうは食べ方も幼くて、口の回りをソースでべと

べとにしたり、人参は嫌一い、と言って野菜をわざと床に落としたりする。将一兄は言った。

「野菜も食え。とはいっても、みゅうの内臓ってのは猫なのか。隆也、猫には野菜は不要だったかな。食わせなくてもいいのか」

「猫は体内でビタミンを作れるんでしたよね。嫌いだったら無理に食わせなくてもいいんじゃないのかな。みゅう、だけど、床に捨てるんじゃないよ。嫌いなものはどけておきなさい」

「これも嫌い、これも嫌い。ハンバーグとごはんだけでいいの」

わがまを言っているみゅうを、兄ちゃんたちは叱ろうとはしない。

ちっちゃいころの僕だったら、兄ちゃんたちが作ってくれたごはんの好き嫌いを言うと、無理やり食べさせられた。それでも僕は意地を張ったこともある。あんなときにも将一兄ちゃんはきびしくて、駄々をこねるんだったらなんにも食べなくていい、と言って、僕を抱き上げて部屋に連れて行って閉じ込めたりした。

「やっぱみゅうには甘いよね。甘やかしてばかり。みゅう、僕だって食べてるんだから、おまえも人参も食べろよ」

「ふーんだ」

憎たらしくも可愛い顔をして、みゅうは僕にあっかんべをする。僕もみゅうに舌を出して応戦していると、隆也兄が言った。

「食事中にこんな話ってのもなんですけど、兄さんたちが来る前に、男のひそひそ声がかすかに聞こえたんですよ。みゅうは耳がいいだろ？ おまえがネズミで遊んでたときに、男たちが近くで喋ってなかったか？」

「聞こえたよ。将一とか隆也とか幸生とか言ってた」

「話の内容は覚えてるか？」

「怪しいって言ってたかな」

聞こえてはいたらしいが、みゅうにはむずかしすぎたのか。みゅうは気にもしていない様子でハンバーグを食べていて、将一兄は眉をひそめ、隆也兄は言った。

「俺にはよくは見えなかったんだけど、若い男と少年がいたように感じました。三人いたのかな。そのときちょうど、みゅうが変身したんですよ。目撃されたんじゃないかと思うんですけど」

「どこの奴らだ？」

「今は学校は冬休みだから、遊びにきている学生ですかね。みゅうは最初は人間で、突然に猫に変身したんです。俺たちはテラスにいて、学生らしき男たちは下にいたんですから、はっきりとは見えなかったはずですよ。大丈夫かな」

「人間の女の子がいたはずが、猫に変わってる。変だな、とは思ったかもしれないけど、変身なんて発想はしないだろ。しかし、冬休み期間にはみゅうは外に出さないほうがいいな。他人に見られる恐れは増えてるんだ」

「そうですね。みゅう、おまえはしばらくはうちでおとなしくしてろ」

「いやだあ」

外で遊ぶのが大好きなみゅうは、意外に寒さもへっちゃらであるらしい。閉じ込めようとしてもどこからともなく脱出するのは、人間の姿をしていても得意だ。兄たちがふたりして、今は危険なんだから、と言いつけてみゅうはいやだいやだと言う。

こうなると僕までが言うと、みゅうはなおさら意地っ張りになる。僕なんかはみゅうにも子供扱いされているようだし、兄に言わせてもみゅうとは対等だそうだから、そうそう、兄ちゃんたちの言う通りだよ、と熱意を込めてうなづくだけにした。

「ごはんはもういらぬ。みゅうは遊びにいつてくる」

「夜になってるんだよ。人間の女の子は夜遊びなんかするもんぢゃない」

相当にきびしい調子で将一兄が言い、隆也兄も言った。

「おまえは寝なさい。ベッドに連れていつてやるから、俺と一緒に寝ような」

「やだやだあ」

「隆也、おまえはみゅうを甘やかすすぎだ。みゅう、おいで。そんなに言うことを聞かぬんだつたら、部屋に連れていつてお仕置きだよ」

「いやあん。隆也兄ちゃん、助けて」

「しようがないな。たまにはお仕置きでもしてもらつておいで。おまえは俺だと甘く見てるんだから、将一兄さんにうんとうんと叱られるといいよ」

「やだ、やだもんっ!!」

みゅうは将一兄に抱かれて連れ去られていく。みゅうは泣き声を出している。隆也兄はため息をついている。僕はみゅうがかわいそうになってきたので、将一兄がいなくなつてから言った。

「お仕置きつてどうするんだろ」

「ひどくなんかしぬいよ。口ではびしびし叱るだろうけど、みゅうは女の子なんだから」

「叩いたりするの？」

「さあね。みゅうは女の子つたつて猫だから、あんなに聞き分けがないんだから、本物のガキだつたおまえが、将一兄さんにお仕置きされた程度だつたらいいんぢゃないかな」

一週間お小遣いナシだつたり、今夜はテレビは禁止だつたり、一時間正座だつたり、そういつたお仕置きはみゅうには効果はないだろう。他にはどんなお仕置きをされたつて？ 叩かなくつても、みゅうに効果のあるお仕置きはあるのだろうか。

「女の子をぶつたりしぬいよね」

「おまえがべそをかかなくつてもいいんだよ。幸生、おまえも妹ができて、兄ちゃんらしくなつたな。心配しなくつていい。将一兄さんは子供の扱いは上手なんだから」

そつか、僕はみゅうの兄ちゃんでもあるんだ。僕には妹ができたつと、半分だけにしつても、妹ができたんだ。明日になつてみゅうがいじけていつたら、なぐさめてやろう。

泣いてないかな、みゅう、だとか、隆也兄ちゃんが言ってた男たちって誰なんだろう、とか考えながらも、僕もベッドに入った。兄ちゃんたちは仕事だろうか。みゅうはおとなしくなったのだろうか。

猫耳の女の子が三人いる。夢？ そのうちの一人は僕？ 一人はみゅうで、三人ともに耳だけが猫だ。もう一人は僕の知らない女の子なのだが、僕はその子をアキラと呼んで話しかけていた。夢なのだったら不思議でもないだろう。

「アキラ、これってコスプレだよね。耳……取れないよ」

「うん、俺も取れない」

女の子なのに「俺」と言うアキラとふたり、耳を引っ張ってみても取れない。みゅうが当たり前みたいに言った。

「取れなくてもいいじゃん。アキラもユキも猫耳が似合っていて可愛いよ。それよりさ、終電はなくなっちゃったんじゃない？ 兄ちゃんに電話して迎えにきてもらう？ 高校生がお酒を飲んで、終電に間に合わなかったなんて知られたら……きゃあ、怖い」

「人ごとみたいに言うなよな。おまえもだろ」

怒った声でアキラが言い、みゅうは言い返した。

「アキラったら、女の子なのにおまえだの俺だのって……アキラの兄ちゃんたちは、そんなふうにもなんにも言わないの？」

「言わないよ。あいつらだって口が荒いんだからさ」

「ユキだったら、俺なんて言ったら叱られるよね」

「だと思うけど、ユキは俺なんて言わないもん。ユキは女の子らしい女の子だもん。それよか、問題はたった今じゃない？ どうやって帰ろうか。兄ちゃんたちの怖い顔……きゃああ、怖いよお」

「ユキ、おまえまでみゅうみたいに言うな」

アキラにも兄ちゃんがふたりいるらしい。僕、ではなくてユキにもふたりいる。アキラは兄ちゃんたちの話をしてくれた。

「おまえんところは二十歳上と十八上なんだろう。俺の兄ちゃんたちは六つ上と四つ上だよ。上の丈人は社会人になったばかりで、下の真次郎は大学生。ふたりともでっかくて荒っぽいんだよな。俺が酒を飲んで終電に間に合わなかったなんて知られたら、きゃああ、俺も怖いよお」

口調は男の子だけど、悲鳴は女の子。アキラはそんな声できゃあきゃあ言い、ユキも一緒になってきゃあきゃあ言い、みゅうは面白がっている。そうしていると、将一兄の声が聞こえてきた。

「おまえたちはまったく……」

「みゅう、電話したの？」

「だって、帰れないんだもん。兄ちゃんにすぎるしかないじゃない」

けろりとみゅうが言い、ユキは泣きそうになり、アキラまでが泣きそうな顔をしている。将一兄はとてとても怖い声を出した。

「三人とも、うちに帰ってお仕置きだ。ついておいで」

きゃあああーっ!! と三人そろって悲鳴を上げ、その声で目が覚めた。

「は一っ、夢。よかった。お仕置きされる前でよかった。なんだろ、あの夢は」

みゆうがされるお仕置き、なんてことを考えて寝たせいだろうか。僕はしっかり目を覚まそうと、着替えてコートを羽織って外に出ていった。朝の空気は澄んでいて、峻烈なまでに鋭い。風も冷たい。散歩なんかする気候ではないので帰ろうとしていたら、背の高い男が目の前に出てきた。

「この山荘の人だね。幸生くん？」

「ううん。あたしはユキ」

「ユキ？ あたし？」

「あなたはだあれ？ ユキは女の子だよ」

「.....男の子にしか見えないけどな。そんな芝居でもしたいのか。ま、いいよ。俺は丈人っていうんだ。近くの貸し別荘に滞在してる大学生だよ」

「社会人じゃないの？ 丈人さんって、真次郎と章って弟がいる？」

「知ってるのか。東京の家は近いから、知られてるのかな」

夢の続きをやろうかと思ったのだが、そこで僕は我に返った。

「僕はほんとは中学生男子なんだけど、本当にそうなの？」

「きみが中学生男子だとは知ってるよ。きみの家族ってのは.....作曲家の上の兄さんと、作詞家の下の兄さんがいるんだね。将一さんと隆也さん」

「そうだよ。よく知ってるね」

「もうひとり、女の子がいる？」

「.....いるよ」

いないとは言えないので、正直に言った。

「なんて名前？」

「みゆう」

「猫みたいな名前だな」

「ニックネームだよ。本名は.....みゆ子」

「ああ、そうなんだね」

みゆ子って名前の女の子はいそうだが、丈人さんは信じてくれたのだろうか。うちの兄たちくらい背が高くて、なんだかとっても強そうだ。目つきも鋭くて、僕の内心を読もうとしているように見えた。

「あ、ごめんなさい。女の子になった夢を見てて、その続きで口のきき方がよくありませんでしたね。丈人さんは僕より年上なんだから、年上のひとには丁寧に喋らなくちゃ。うちの兄ちゃんたちってそういうの、うるさいんですよ」

話をそらしたいのもあって言うと、丈人さんは微笑んだ。

「きみは育ちがよさそうだな」

「育ちがいいってどんなのですか。兄ちゃんたちに言わせると、両親がいなくて雑駁な男ふたりで育てたから、おまえはませガキになったんだ、みたいですよ」

「うちの章よりは……章はきみよりはひとつ年上なんだよ。遊び相手にはちょうどいいんじゃないのかな。俺たちが借りてる別荘に来る？」

兄ちゃんたちに断ってこなくちゃ……そう言わなくてはいけないのに、僕はうなずいてしまった。

「章さんに会いたいです」

だって、アキラって女の子が夢に出てきたんだもん。章は男の子なんだろうけれど、目覚めからの時間は短いから、夢に出てきた猫耳少女は記憶に鮮やかだ。章に会いたくて、僕は丈人さんについていった。

徒歩で行くには少々遠いからか、丈人さんは走れと言う。朝っぱらからランニングか。体力を鍛えるのが趣味で、丈人さんはこんなに強そうなのか。僕は強くはないけれど、体力はまあまああるつもりなので、走っていった。

「幸生くんはけっこうタフなんだな。章よりは強いみたいだぜ」

「幸生って呼んで下さい。僕はまだ子供なんだから」

「しおらしいね。なんかたくらんでないか」

疑いの目は向けたものの、彼らの貸し別荘につくころには、丈人さんは僕を、幸生、おまえ、と呼ぶようになっていた。

小さい貸し別荘につくと、もうひとりのお兄さんが出てきた。いらっしゃい、と言ってから、真次郎さんは僕を値踏みでもしているような目で見下ろす。このひとも背が高く、章って子も大きいのかと思っていたら、真次郎さんが言った。

「章はまだ寝てるよ。叩き起こしてこようか」

「叩き起こさなくてもいいけど、起こしてこい」

「ぶん殴るか蹴飛ばすかしなければ、あいつは起きねえだろ。兄貴がやるか」

「おまえにまかせるよ」

夢でアキラが言っていた通りで、真次郎さんは言葉遣いが荒い。隆也兄は将一兄に敬語っぽく喋って、そっちのほうで兄弟としては変わっているらしいと知ってはいたが、僕にはちょっとびっくりだった。

びっくりといえば、弟を起こすのにぶん殴るの蹴飛ばすのって……僕だって寝坊して兄ちゃんたちに怒られたりはしたけれど、そんなんで殴られるはずもない。ちっちゃいころだったら、起こされても起きなかったら、抱え上げられてお風呂場に連れていかれて、裸にされてシャワーを頭からかけられて、そうして起こされたりもした。あれもけっこう荒っぽいのか？

「こら、章、起きろ!」

家の中に入っていった真次郎さんが、怒鳴っているのが聞こえてきた。低くて太い声の真次郎さんは全身迫力に満ちている。まだしも丈人さんのほうがソフトなのかな、と僕が考えているうちに、どすん、ばたん、という音も聞こえてきた。

「ベッドにしがみついている章を、真次郎が抱え上げて投げ飛ばしたんだろ」

「そうやって起こすんですか。小さいころだったら僕も兄ちゃんたちに、抱き上げられたりはよくしたけど、投げ飛ばされたりなんかしませんでしたよ」

近頃は僕もそんなに手はかけられなくても起きるようになったのだし、みゅうだったら兄ちゃんたちは人間の姿をしていても軽々と抱き上げるものの、僕を抱え上げたりはしない。前にされたのはいつだったか？ 小学生のときか。

中学生になった僕だって、身体は大きくないのだから、兄ちゃんたちには抱き上げるのは簡単はずだ。あれって僕のプライドを尊重してくれているのだろうか。

僕は猫のみゅうだったら軽く抱っこできるけど、人間になっているみゅうだと抱き上げられない。だから、みゅうが駄々をこねていても、兄ちゃんたちみたいにはできない。隆也兄はみゅうを抱っこして優しく言い聞かせ、将一兄はみゅうを抱っこしてきびしく叱る。僕にはどっちもできない。

だから僕はみゅうにまで子供扱いされるんだ。僕も早く大きくなりたいな、と考えていると、うぎゃーっ!! と大声を上げて、パジャマ姿の少年が走り出てきた。

「章さん？ ちっちゃいんだ」

思わず言うと、ねぼけ顔の章くんは僕をぎろっと睨んだ。

「誰だ、てめえ？ てめえだってちびだろっ!! いてっ!!」

「挨拶もしないで、のっけから喧嘩腰になるな」

丈人さんにぼかっとやられた章くんは、それで目が覚めたのか、僕をじっと見た。

「おまえ、誰？」

「僕は幸生です。ユキちゃんでもいいですよ。章さん、おはようございます。章さんって僕と似た立場みたいだけど、兄ちゃんたちは大きくて、弟は小さいってところまで似てるんですね」

「幸生、章には丁寧に喋らなくてもいいんだよ」

穏やかな口調で僕には言った丈人さんが、章くんに向き直った。

「着替えてこい。おまえはまったく無作法なんだから。育ちのいい幸生の前では、おまえは野育ちに見えちまうよ」

「兄ちゃんたちが悪いんだろ。腹減ったよ。メシは？」

「真次郎が作ったんじゃないのかな。幸生も食ってくか」

断りもしないで出てきたんだから、兄ちゃんたちが心配する、とは思ったのだが、好奇心には勝てず、僕はうなずいた。

メシを食うのも行儀のいい幸生が加わっていると、うちの兄貴たちの行儀の悪さが際立つ。しかし、こんな兄貴たちだからこそ、俺の行儀がよくないのもうるさくは言わないのだろう。両親と暮らしていたころには、母はうるさかったので、俺もちょっとは行儀を気にしていたのだが、兄貴たちとだったら気にもしなくなった。

育ちがいいと丈人が言う幸生の家庭の事情は、丈人から聞いている。俺には両親は故郷にいるのだが、幸生にはいない。小学一年生から兄ちゃんたちに育てられたそうなのに、あの兄たちは俺の兄貴たちとは大違いだからこそ、なかなか行儀のいい奴に育ったのだ。

行儀はどうでもいいにしても、幸生と兄貴たちと四人でメシを食って話していると、俺は夢を思い出してしまう。だいぶ前の夢だから、記憶はかなり薄れてはいるが、夢の中では幸生も俺も女の子だった。

あの夢を見たころには、幸生なんて奴は知らなかった。なのに、どうしてかあんな夢を見て、こうして現実で知り合った。予知夢、告知夢、にしたって、なんだって幸生も俺も夢では女の子だったのだろう。

もしかしたら、変身猫がからんでいるのだろうか。丈人が幸生をここに連れてきたのは、そこを探るためだろう。俺はよけいな台詞は口にしないようにして、幸生と学校の話をしたり、趣味の話をしたりしていた。

「章くんも音楽が好きなんだね」

「好きだよ。俺はロック好き。ギターも弾けるんだ。兄ちゃんたちのほうがはるかにうまいけど、三人でギタートリオってのも、俺にもなんとかついていけるかな。兄ちゃんたちも幸生に聴かせてやろうよ」

「それもいいな。俺がギターを持って来るから、章は片付けておけ」

言った真次郎が立ち上がり、幸生は言った。

「僕も手伝うよ」

「手伝うってほどでもないじゃん。おまえがひとりで片付け……タケ兄ちゃん、怖い顔しなくても俺もやるってば」

「当然だろ」

幸生とふたりで食卓を片付け、皿洗いもやってから、兄弟トリオのギターを聴かせてやった。俺はつかえてばかりだったのだが、演奏が終わると幸生は拍手してくれた。

「章くんもうまいじゃん。僕にもギターを教えて」

「俺に教わるよりもタケ兄ちゃんのほうがいいよ」

「僕もギターがほしいな。僕は将来は歌手になりたいんだ。うちの兄ちゃんたちはギターよりもピアノだから、僕もピアノだったら弾けるんだけどね」

「買ってもらえよ」

「ギターを？ そうだね。ギターだったら買ってくれるかな」

「おまえんち、金持ちなんだろ」

小さく吐息を漏らして、幸生は言った。

「お金はあるんだろうけど、誕生日とかクリスマスとかじゃなかったら、そんなには買ってくれないよ。ちっちゃいころにはおねだりを聞いてもらえなくて駄々をこねて、兄ちゃんたちに叱られた。このごろは叱られるってこともあまりないけど、将一兄ちゃんも隆也兄ちゃんも躰はきびしいんだ」

「躰がきびしいからこそ、幸生はそういう少年に育ったんだろ」

丈人が言い、真次郎は曖昧にうなずいた。

子供のころに両親を亡くした幸生は、兄たちに躰を受けたのだ。うちには両親がいたから、兄たちが俺を教育するなんてことはなかった。叱られるのではなく怒られたり怒鳴られたり、軽めではあるが殴られたり。

そういった事情で、幸生の兄ちゃんたちは大人なのか。年齢もうちの兄貴たちよりは上だが、落ち着いた立派な大人の男に見えた。幸生の話からしても、彼らはすでに子育てをした大人なのだろう。うちの兄貴たちと大違いなのは当然だ。

「クリスマスプレゼントをお願いしたら？」

俺が言うと、幸生は嬉しそうにうなずいた。

うちの兄貴たちにはプレゼントなんてもらったこともないが、ギターは丈人が買ってくれた。生活費も小遣いも両親の仕送りで賄っているのだから、稼いでいる幸生の兄たちのようにはいかない。やっぱ地球防衛軍にはギャラはないのか？ そのせいで兄ちゃんたちはバイトもできないのにさ、と考えていると、ドアの外で男の声がした。

「うちの弟がお邪魔していませんか」

「将一兄ちゃんだっ!!」

はじかれたように幸生が立ち上がり、玄関へ走っていく。俺たちもあとからついていくと、幸生がドアを開けた。外には遠くからなら見た、長身で綺麗な顔立ちの男が立っていた。

「幸生、なんの連絡もなく行方不明になるとは……帰ったら……」

「うわーんっ、ごめんなさいっ。忘れてたよっ!!」

「電話くらいできるだろ。おまえとの話はあとだ」

将一は俺たちに向かって頭を下げた。

「幸生がご迷惑をおかけしました」

頭を上げると、目がきらっと光る。なにやら疑っているのか。俺は兄貴たちのうしろに立ち、丈人が言った。

「迷惑ではありません。俺が誘ったんですよ」

「家に電話しろと言いつけていただきたかったですね」

「俺も忘れてました。申し訳ありません」

こっちの三人が自己紹介をすると、将一は言った。

「幸生だって小さな子供ではないんだから、自分の判断で連絡はできますね。あなたに文句を言うのはお門違いだ。こちらこそ、申し訳ありません。幸生、挨拶しなさい。帰るぞ」

「兄ちゃん……僕、帰ったらお仕置き？」

「こんなときに連絡もなしで行方不明になって、隆也も俺もどれだけ心配したと思うんだ。罰を

与えないといけないな。おまえももう小さい子供ではないんだから、男の子はこれでいい」

張り飛ばすって意味か。将一は片手を上げ、幸生は首をすくめ、丈人が言った。

「いや、こうなったら言うしかないかな。幸生くんは悪くないんです。俺ですよ」

「あなたが？」

「こんなときって台詞もひっかかったんだけど、それはあとでね。あなたは俺たちを疑ってるでしょ？俺たちもあなたを疑ってる。だから、幸生くんをここに連れてきて、兄さんたちには連絡させないようにして、幸生くんに話を聞いたかったんですよ」

「もっとも小さい幸生をターゲットにした？卑怯だな」

男ふたりが睨み合う。ふたりともに目の光が強い。びびりそうになった俺を、真次郎がうしろに押しやって進み出た。

「遠回しに言わなくてもいいだろ、兄貴。言っていていいよな」

「いいよ」

「あんたらの家にいる猫女、あいつはなんなんだ」

うきゃっ、と幸生が叫び、将一も一瞬目を丸くしたのだが、動じずに言った。

「見られてましたか。けれど、丈人くんは幸生の心を操作したのではないかな。幸生に連絡もさせなかったって、脅迫されたの誘拐されたのじゃないだろ、幸生？」

「僕もここに来る前は、兄ちゃんたちに断っていかなくちゃ、って思ったんだよ。だけど、章くんに会いたってのもあったし、ここに来たらすっかり忘れちゃったんだ。楽しかったからかと思ってたけど、兄ちゃんたちが心配するのはわかってたのに、忘れちゃうって変だよな」

「変だな。忘れる前に連絡しなかったのはおまえも悪いんだけど、心をコントロールされたようでもあるよ。丈人くん、うちの猫娘も怪しいんでしょうけど、きみたちも怪しいね」

「お互いに腹を割って話しましょうか」

「隆也叫びますか」

改造人間の兄貴たちなのだから、動揺もしていないのは不可解でもない。しかし、将一もどっしり構えている。将一は隆也に電話をかけ、丈人は俺に言った。

「幸生を連れて二階に行ってる。大人四人で話すよ」

「幸生の兄ちゃんたちと較べたら、うちの兄ちゃんたちってガキって気がするけど、その分、普通の人間じゃないから大丈夫か」

普通の人間じゃない、なんて言ってしまってから後悔したのだが、丈人は聞こえてもいなかったそぶりで言った。

「真次郎は未成年だから大人じゃないよな。半人前と成人三人で話すよ」

「兄貴、俺はガキだって言いたいのか」

「将一さんと較べたら、俺だってガキなんだろ。幸生、おまえの兄貴ってすげえよな」

「はいっ!!」

嬉しそうに幸生は答え、俺は丈人の耳元で言った。

「幸生には話していいの？」

「俺たちも幸生の兄さんたちには話すつもりでいるんだから、いいよ。おまえのメイドルックの

話もしてもいいぞ」

「そんな話はしねえよっ!!」

こんな際でもこれなのだから、丈人は改造人間ではなかったとしても、普通の男ではないのではないのだろうか。まあ、そんなのはどうでもいい。俺は幸生を連れて、階段を上っていった。

やがて、隆也もやってきた気配がした。階下では男たちが挨拶をかわしている声が聞こえる。俺は幸生とふたり、階下の声に耳を澄ましてから、さて、こいつにはなんと切り出そうかと悩んでいた。悩んでいる俺を見ていた幸生が、先に言った。

「普通の人間じゃない？ メイドルックってなに？」

「こっちの話だよ」

「メイドって女の子だよ」

「普通はそうだよ。俺は男だよ。女装趣味もないよ」

「男なのは見たらわかるけど、僕さ、変な夢を見たんだよ」

「夢の話か」

つまらなそうな顔をしてはみせたのだが、俺の心臓はどきどきしてきていた。もしやまさか、幸生と俺の夢が同じだったとしたら、いや、先走らずに幸生のユメバナを聞こう。

「アキラって名前の女の子と、僕も女の子になってる夢だったんだ。もうひとり女の子がいたんだけど、その子は関係ないかな。アキラとユキともうひとりの子と三人で、お酒を飲んで終電に間に合わなくなって、将一兄ちゃんが迎えにきてくれて、帰ったらお仕置きだよ、って言われて、三人そろって悲鳴を上げた」

「それだけ？」

「それだけしか覚えてないけど。そこで目が覚めたんだ」

「俺もはっきり覚えてないけど……似てるよ」

「章くんもそんな夢を見たの？」

「ちょっと待て。思い出すから」

一部は似ている。俺の夢はもっと長かったし、女の子はふたりだけだったが、ユキとアキラが酒を飲んで、将一さんが車で迎えにきた。そのあたりはそっくりだ。

「……って、俺もそういう夢を見たよ。俺は昨日、おまえたちをこっそり見てたんだ。将一さんとおまえが車で山荘に来て、隆也さんが迎えに出て、猫もいっただろ。その前にテラスで、人間の女の子が猫に変身するシーンは、シン兄ちゃんが見たんだよ」

「隆也兄ちゃんが言ったのって、それだったんだね」

気づかれていたのか。だから、将一さんも結びつけたのだろう。

「そのときに思い出したんだよ。この幸生って、俺の夢に出てきたユキの男版だって」

「僕も章って名前と、夢の中のアキラの話をつなげたんだよ」

「夢はどうでもいいっちゃどうでもいいけど、おまえと俺が出会う布石ってのかな。おまえんちの猫は変身するんだろ」

「うん。章くん、驚いてないんだね」

「うちの兄貴たちも変身するんだよ」

「ええ？」

最初はびっくりしたようだが、俺が詳しく語るうちに、幸生の表情は平静になっていった。「章くんも僕も、普通の環境じゃないんだね。似た境遇って部分があって、こうして出会ったんだ。夢は伏線なんだよ」

「ミステリ小説みたいに？」

「ミステリ小説なんかよりずっとずっと……」

「俺たちの境遇は複雑だな」

うんうん、とうなずき合ってから、幸生が言った。

「章くんはみゅうが変身猫だって信じてるよね」

「シン兄ちゃんはそのう嘘はつかないよ。おまえも信じた？」

「信じるよ」

証拠なんか見せなくても、幸生は自分自身も妙な境遇にいるからこそ信じる。俺だって信じる。普通の人生を送っている奴にはとうてい信じられないだろうから、幸生は得がたい友達なのかもしれない。

「東京の家は近いんだったよね。僕は章くんって知らなかったけど、章くんの高校、僕の志望校なんだよ」

「俺もおまえは知らなかったけど、そしたら、高校では先輩と後輩になるのか」

「僕が合格したらね。先輩、よろしく」

「うん、よろしくお願いされてやるよ。けど……」

高校一年の幸生と、高校二年の章が、女の子のユキとアキラに変身する。あの夢だけは実現してほしくなかった。

お互いの身近にいる変身動物の話をつやすく信じ、秘密を口外するわけもない友達。他人でみゅうの正体を知ったのは章くんひとり。章くんの兄さんたちの正体を知ったのも僕ひとり。章くんと僕の心は秘密によって堅く結びついた。

章くんの兄さんたちと僕の兄たち、四人の話し合いもすみ、怪しい奴らだと思われていたうちの兄たちの疑いも晴れたようで、僕は兄ちゃんたちと山荘に帰っていった。

「みゅう、いい子で留守番してた？」

人間の姿でいるみゅうに、帰ってすぐに僕は話しかけた。

「ごめんね、ひとりぼっちで寂しかったらろ」

「隆也兄ちゃんまで言うんだもん。おとなしくお留守番してないと、これだぞって」

「これだね？」

「幸生までえ……やだやだやだっ」

これ、と言って僕も手を上げると、みゅうが泣き出した。

「ごめん。僕はしないよ。絶対にしないから。昨夜は将一兄ちゃんにうんと叱られたの？」

「うん。ぶたれたりはしなかったけど、この次にひどく叱られるようなことをしたら、本当にぶつって」

脅しだろうとは思っただが、僕も言っておいた。

「だからさ、そんなに叱られないようにしたらいいんだろ」

「うん。でもね、みゅうは……みゅうは猫だから、幸生みたいにいい子にできないんだもん」

「僕はいい子でもないけど……うん、でも、僕はもう子供じゃないからね」

「子供のくせに」

天真爛漫だったみゅうも、すこしずつ成長しているのか。兄ちゃんたちがみゅうもきびしく躰けようとしているのは、いいことなのだろうか。僕にはわからないけれど、人間の中で暮らしているみゅうなのだから、猫そのものではないのだろう。

今日のみゅうは僕にも素直に接している。隆也兄ちゃんが作ってくれたお昼ごはんも、わがままを言わずに食べた。

兄ちゃんたちが仕事をはじめると、僕はみゅうと庭に出た。昼間は寒さもやわらぐので、みゅうと手をつないで散歩ができる。白いコートに白いブーツのみゅうは、軽やかに歩いている。その仕草は猫めいていて、魔性の美少女にも見える。

と、樹木の根元から小さな動物が飛び出した。みゅうは瞬間的に猫の野生を取り戻し、動物を追いかける。冬眠中のリスが寝ぼけて飛び出してきたのか。庭の垣根も跳び越し、素晴らしいスピードで駆けていくみゅうに、僕ではとても追いつけなくて、叫んでいた。

「みゅう、遠くに行ったら駄目だよーっ!!」

目の前を赤い虫が飛んでいる。うっとうしいので追い払おうとして、手が止まった。

「赤い虫って……丈人さん？」

鋼鉄製の虫に変身する兄ちゃんたちなのだと、章くんが言っていた。虫は逆変身をして丈人

さんに変わり、リスよりも早いのではないかと思えるスピードで、みゅうを追っていつつかまえてくれた。

「俺はきみの兄ちゃんたちの知り合いだよ。ひっかくなって。幸生、なんとか言ってくれ」

猛り立って髪の毛を逆立て、爪も立てているみゅうを抱いた丈人さんが、木立のむこうからあらわれた。

「丈人さん、ありがとう。みゅうが興奮してどこかに行っちゃったりしたら……みゅう、駄目だよ。帰ってきてくれてよかった」

泣きそうになって僕は言ったのだが、みゅうは聞いていない。丈人さんに抱かれて大暴れしている。みゅうにとっては知らないひとなのだから、警戒心をあらわにしているのだろう。人間の姿をしているのに、しゃーっ!! ふわあーっ!! と吠えていた。

「みゅう、丈人さんをひっかいたら駄目だよっ!!」

すーっと息を吸い込んでから、丈人さんが怒鳴った。

「みゅう、おとなしくしろっ!!」

みゅうは硬直したようにおとなしくなり、丈人さんはみゅうのほっぺにキスした。

「可愛いな。可愛くて性悪ってのは、猫なんだから当然か。それにしたっておまえはとびきり可愛いじゃないか。その愛くるしい目……俺はおまえに恋をしそうだよ」

「丈人さん、みゅうは猫だよ」

「半分猫でも全部が人間でも、女はたいして変わりはしないよ。みゅう、俺の女にならないか」

「みゅう……」

僕はおろおろしていたのだが、みゅうは丈人さんの首にしがみつき、甘い甘い声で言った。

「丈人さん？ 素敵」

「やめといたほうがいいよ」

そこに聞こえてきたのは章くんの声だった。

「タケ兄ちゃんってメチャクチャもてるんだからさ、みゅうがこいつの彼女になったら、やきもち妬いてひっかきたくなくてばかりいるよ。その上、この丈人は……男にでも言うんだぞ。おまえに恋をしそうだってさ」

「あれはジョークだよ」

「あんなジョークは普通の男は言わないんだよ」

「普通の男はメイドルックを……」

「てめえはうるせえんだよっ!!」

「おまえは兄に向かって、なんなんだ、その言葉遣いは。てめえだあ？ こいつって誰だ？ 丈人って呼び捨てか」

「ごまかそうってそうは行かないんだよーだ」

「このガキ。おまえもきびしく躡けてやろうか」

「いらねえよ」

やはりこの兄弟は、僕たちとはずいぶんちがう。丈人さんと兄弟喧嘩をしている章くんに、僕は尋ねた。

「メイドルックってなんのことなの？」

「いいのいいの。おまえにゃ関係ないんだよ。タケ兄ちゃん、言うなよ」

「さあな。どうしようかな」

なんのことだかさっぱりわからないけれど、東京に帰っても章くんとは会えるだろうから、じっくり問い詰めよう。他にも問い詰めたいことはたくさんありそうだし、僕がそう決めていると、章くんがみゅうに言った。

「それよか、俺はどう？ 年頃からしても俺のほうが似合いじゃない？」

「ガキがなにをほざいてやがんだ？ え？ 章？」

「わっ!! キックはなしっ!!」

凄みのある声で言って弟を蹴ろうとした丈人さんから、章くんは逃げ出し、みゅうは尋ねた。

「あんた、誰？」

「丈人の弟。章っていうんだよ。幸生とは友達だよな」

「友達だけど、みゅうはあげないよ」

丈人さんの腕から、みゅうを奪い返したい。けれど、僕の力ではできないだろうから、兄ちゃんを呼んだ。

「将一兄ちゃんっ、隆也兄ちゃんっ!! 悪い男がみゅうを誘拐しようとしてるよーっ!!」

「幸生、おまえの兄ちゃんたちは普通の人間だろ。タケ兄ちゃんがその気になったら、一撃で蹴り飛ばされるぜ。みゅうを抱いてたって脚は空いてるんだからさ。無駄無駄」

鼻高々みたいに章くんが言ったとき、隆也兄が出てきた。

「改造人間だからって、みゅうのためだったら闘うよ。しかし、みゅうがいつか、丈人くんに恋をして、そうして結婚でもするって言うんだったらともかく、みゅうはまだ子供なんだ。丈人くん、聞き入れてくれないかな」

「じゃあ、みゅう、婚約しようか」

みゅうは首をかしげていて、章くんが言った。

「タケ兄ちゃん、婚約不履行で訴えられるよ」

「おまえはさっきから次々によけいなことばかり……」

片腕でみゅうを抱き直し、片腕で章くんを抱え上げ、丈人さんは弟を近くの樹木の高い高い枝に乗せてしまった。章くんは太い枝にすがりついて、悲鳴を上げた。

「うぎゃーっ!! 落ちるっ!!」

「落ちる前に受け止めてやるさ。おまえはそこで静かにしてろ。隆也さんって度胸はたいしたもんだな。度胸だけでは俺に勝てるはずもないけど、ただの人間なんだからしょうがない。いずれはあんたらと勝負ってことになりそうだけど、腕力じゃない勝負を考えておいてくれ」

丈人さんが言い、隆也兄も言った。

「考えておくよ」

ふたりが視線で火花を飛ばし合っている。

これってつまり、隆也兄ちゃんもみゅうが好きってこと？ 丈人さんも隆也兄も、みゅうに恋してる？ もしかしたら将一兄も？ 章くんまでが？

みゅうはそれほどの美少女で、魔性の女というか猫というか、なのだから、男の心を狂わせる

のだろうか。では、僕は？僕はみゅうをそんな目を見たことはないが、真次郎さんもみゅうを見たら、恋をしてしまうのか。

そんな事態にはなってほしくない。だからね、みゅう、早く大人にならないでね。僕が大人になるころに、みゅうも大人になる。そのくらいのペースで成長して。

そしたら、章くとだったらライバルになるかもしれないけど、うちの兄ちゃんたちはそのころにはもうおじさんだ。丈人さんと真次郎さんも中年に近くなる。章くんひとりだったら僕も勝てるかもしれないけど、他の大人は無理。無理ったら無理。

兄ちゃんたちとライバルなんて考えたくもないし、改造人間と戦うなんて、想像しただけで気絶しそうになる。だから無理だ。

「どれにしようかな」

地面に下ろされたみゅうは、性悪猫の顔で男たちを見比べ、僕に抱きついた。

「今は幸生がいい」

「おーっ、勝った!!」

今は、ってのがついてるのが気がりではあるが、今だけにしたって僕は勝ったのだ。みゅうは僕を選んでくれた。みゅう、僕が大人になるまで、きみも大人になるのは待っててね。僕は兄ちゃんたちに負けないカッコいい男になるからさ。

僕はガッツポーズをし、丈人さんはがっくりポーズ。隆也兄は苦笑い。樹の枝に乗せられた章くんただひとりが、本気で悔しそうに僕にガンを飛ばしていた。

END

## Transformation rhapsody

<http://p.booklog.jp/book/31589>

著者 : quianred

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/quianred/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31589>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31589>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.